

本校における必修クラブ活動について

—— 経 緯 と 問 題 点 ——

教 務 部 岩 城 谷 滋

目 次

1. 経 緯	2 頁
2. 経緯と特色の一覧	4 頁
3. アンケートによる意識調査 (1)	6 頁
4. 顧問の意見	10 頁
5. アンケートによる意識調査 (2)	12 頁
6. 問 題 点	13 頁

1. 経 緯

昭和48年度から必修クラブ活動を実施するよう告示（文部省告示第281号、昭和45年10月15日付）され、それに基づいて、研究準備期間を経て、実施されてから、今年で5年目を迎えたわけだが、研究準備期間を含めると、5年以上経っている。その実体は各学校によってまちまちであろうが、こゝで本校のその経過をふりかえってみて、問題点を考えたい。

実施2年前の46年に、本校では、学習指要領に基づいて、必修クラブ編成の方針を討議するため、その原案作成の資料を作り、討議し、基本的な考え方をまとめた。その資料とは、必修クラブ活動の説明を生徒側にし、生徒の希望調査をまとめたものであり、その特色は希望クラブ数が81の多岐にのぼったことだった。これに対して、教官の希望を調査し、結局、現在のクラブ活動を改善し、それを必修クラブ活動にするという意見が大多数を占めた。従って、基本的な考え方は、課外部活動を必修クラブ活動にすりかえることと、その数は、教官数と一致させ、外部講師の導入は考えないということだった。

ところが実施1年前の47年には、特別教育活動研究委員会が設置されて、対策が一段と具体的に強化され、この基本的な考え方は大巾に修正された。研修討議の末、必修クラブ活動に対する基本的な方針が立てられ、目標（目的）が決定され、編成方式や活動内容まで具体的に細案をつくりあげた。それによると、従来の課外部活動とは全く関係させないで、別個のクラブ活動とし、学年学級の枠をはずして、各学級から男女別に公平に機械的に選出した生徒25～26人を1チームとして16のチームをつくるというのが基本的な方針と編成であった。また目的は、全人教育の一環として、必修クラブ活動の位置づけを計り、「できるだけ多くの事を体験し、いろいろな人の立場を理解できる包容力のある人間の育成」につながるような活動にするということだった。この目的を充たすより具体的な活動内容は「日本を知り世界を識ろう」という標題の下に、日本の伝統と文化、世界の文化、自然と科学、スポーツの4項目にまたがった活動であった。しかし、「できるだけ多くの事を体験する」ことは、実際には、少しずつ浅くしか活動できないことを意味しており、その点で、生産性に乏しく、また、ある程度の深みが得られない不足があって、この点の改善を計って、いよいよ必修クラブ活動実施の初年度である48年に入ったわけである。この改善は、各チームがテーマを掲げて内容を1つに固定する活動で、その上、チーム編成には生徒の希望も入れて選択させる方法にし、公平な機械的な配分を廃止したことであった。チーム編成には、男女別学年別の定員の枠を設けていて、この条件は曲げずに守りながら生徒にテーマを選ばせる方法で、定員がオーバーすれば、選択をくりかえしさせて、次第に定員に近づけて行かせたわけである。これによって、この実施初年度の活動の特色は3つの欠陥となって表われた。それは、テーマを1本にしぼったことで、深く知ることにはなったが、年間通して固定されているため、次のテーマに移ろうにも移れないことであり、テーマは選択できるものの、それは与えられたテーマであって、生徒側が話し合って選び出したテーマではないということであり、チーム選択の頭初の希望が必ずしも充たされていないということである。

必修クラブ活動実施2年目の49年には、この三つの欠陥のうち、改善らしいものがうちだされたのは、年間通してのテーマが同一のものの外に2つのテーマを追及するチームが新たに設けられた位のもので、他は、この年で実施2年目だから、1,2年の2箇学年の生徒が活動するため、チーム数、構成員数の増大が起った位であった。それによって顧問数も増大したことはいうまでもない。チームによっては、年間通して、同一テーマで活動するものと、2人の顧問のペアで、前期後期の2期に分けて、年間2つのテーマで活動するものと2種

がこの年に誕生したわけである。この特色は、12種のチームの中からどれかを選ばせるわけだが、後期のテーマが変ることを見こして選ぶとなると、生徒の好きな組み合わせ、生徒の関心と呼ぶ組み合わせ等がそうあるわけではないということである。また他に、定員以上の選択者数がでれば、結局その内の幾人かは他に移らざるを得ない。そこに当然なことながら、いろいろな問題が出てくる。また、活動内容を顧問の方で決めたことに対しても、生徒の希望は一切無視されていることも、前年から引き続いた問題である。

しかし、生徒側の希望を受入れて、自主自営のテーマの決定、クラブの加入等を認め、その上、いろいろな不満、非難に耳を傾けるとすれば、結局は必修クラブ活動の学校運営に支障を生じ、廃止する方向に行かざるを得ないのではないかという結論を下して、以降、この基本的な考え方を変えることなく、継続して行くことに決めたわけである。

この基本方針は、昭和51年度、実施後通算4年間、多少の改善を加えつつも一貫して維持され、活動に移されてきたが、その間の生徒側、教官側の意見等については後述に譲るとして、また問題点の論及についても後述に譲るとして、ここで、実施3年目の50年の特色を述べておかなければならない。3年目は、3年在学の生徒の必修クラブ活動をどのように扱うかの該当年である。本校では、この必修クラブ活動の実施を1、2年の2箇年ですることによって決定した。他に、顧問の提唱するテーマについては、前年のテーマとの関係は一切考慮せず、変更も自由ということにしたのも特色に入るだろうし、この年から、活動記録が毎回記録簿に記録されることとなったこともそうであろう。しかし、実施3年目においてはじめて全学年を通して全生徒が必修クラブ活動に参加できる年であるから、この年こそ1年から3年までのいわゆる縦の関係を解いて全員が横の関係で活動できる年である。そしてこの年にこそ、この必修クラブ活動の目的と効果がどのように充足されたか判る年である。それにもかかわらず、本校は3年生の参加を外してしまったのである。目的と理念は崇高にうたいあげてはみたものの、その実現まで遂行するには見通しと自信はなかったといわざるを得ないのである。一番大きな隘路は何といっても3年生の進学問題との関係で、必修クラブ活動は1、2年にとどめておく結果となったわけである。

当初の草案作成者、施行計画の遂行係等、およそこの必修クラブ活動の実施に当っては、年々顔ぶれが変って行くと同時に、この必修クラブ活動の実体も変って行き、この昭和52年には、従来の殆んど全ての隘路を払拭する大改革を実施するに至りました。やはり、48年から実施して5年目ということもあって、毎年少しずつの改良を加えてみても根本的に変りがないことであれば、変化はないこととなるのでしょう。この年は生徒の言い分を聞き入れたし、運営、計画立案を全て生徒の自主自律にまかせたし、テーマの選択、参加も全て生徒の好きなようにさせたわけである。従って顧問はほとんど何の指導もなく、出席簿の受け渡しと、記録簿を読むこと位の仕事でしかなく、相談を受ければ、それに応ずる程度の指導となった。ただ一つ学校側から設けた枠といえば、全ての必修クラブ活動は何かを造り出さなければならないというくらいのものであった。これは新たな実験であり、先に決定していた施行方針を大きく変更させる改革でもあるので、じっくり腰をすえて観察し、より良く改善して行くよう時間をかけたいので、次の発表時まで詳述することを控えておきます。

2. 経緯と特色の一覧

本校では必修クラブ活動を特別な呼称名で扱っております。このことは昭和48年度に広く全国に向けて公開した時に既に発表しておりますが、「チーム活動」と呼んでおります。次に各年の特色を一覧表にしてあります。

年 度	1. 昭和47年度(実験年)	2. 昭和48年度(実施初年度)	3. 昭和49年度(実施2年目)
チーム数	8 チーム	8 チーム	12 チーム
チーム名	第1～第8の序数をもつてチームを呼称	1. 文学と風土 2. 外国語を話そう 3. 四季の星座 4. コンピューターの基礎と応用 5. みんなで歌おう世界の歌 6. 能の世界 7. 世界の料理 8. 茶の味・茶の心 全レクリエーションスポーツ	1. 読書・余暇活用 2. 教育映画を・金沢スケッチ見て話そう 3. 金沢スケッチ・音楽 4. 金沢を見る・読書 5. 音楽・机上世界旅行 6. コンピューター・金沢を観る 7. 机上世界旅行・料理 8. オリエンテー・教育映画をリング見て話そう 9. 囲碁と道理 10. 将 棋 11. 料理・オリエンテーリング 12. 余暇活用・コンピューター
チーム編 成	チーム員・学年男女別の公平な機械的割当	第1次希望選択(繰返しと抽選)	同 左
チーム構 成	定員制(1年男女別・17名)	同 左(学年別・男女別・34名)	同 左 (24～25名)
チーム顧問	顧問指導制	同 左	同 左 (HRAの顧問免除)
テーマ	テーマ・毎時変移(計画的・年間)	テーマ・固 定(年間・顧問提示)	同 左 (年間同一のものと、 半期毎に変わるものと の2種・顧問提示)
テーマの組合せ	チーム員の自主的選択と組合せ		半期毎に変わるものの組合せは学校の操作
計 画	計画立案の自主制	計画立案の話し合い	同 左
回数と時数	年間実施回数 8回・16時間 (学校側決定)	同 左 9回・18時間	同 左 12回・24時間
参加学年	1 年	1, 2 年 (2年は義務がないが、 実験的に参加)	1, 2 年
実施の仕方	臨 時	ホームルームと交互に隔週毎に1回連続して2時間	同 左

年 度	4.昭和50年度(実施3年目)	5. 昭和51年度(実施4年目)	6. 昭和52年度(実施5年目)
チーム数	1 2 チーム	1 2 チーム	1 9 チーム
チーム名	1. 茶の味・チェスをやろう 2. 工作・珈琲と占いの世界 3. 料理・コンピューター 4. 写真・卓球 5. 囲碁の世界 6. 卓球・読書 7. 日本の遊び・音楽 8. コンピューター・日本の遊び 9. 将棋・工作手芸 10. 音楽・茶の味茶の心 11. 読書・料理 12. 珈琲と占いの世界・写真	1. 写真・テレビを見て勉強しよう 2. 写本で古典・チェスをやろう 3. 料理・読書 4. 茶の味・コンピューター 5. 囲碁の世界 6. 将棋をしよう 7. チェスをやろう・茶の味 8. テレビを見・写本で古典で勉強しよう 9. コンピューター・料理 10. 歌留多倶楽部 11. 読書・写真 12. 英 語	1. 放送劇の製作 2. 六人乗り自転車の製作 3. 8ミリによる映画製作 4. 立体壁画製作 5. 絵本製作 6. 花・野菜を栽培 7. 水上自転車を作る 8. 遊園地を作る 9. 文芸作品の創作 10. 冊子をつくる 11. 楽器を製作 12. テレビ番組をつくる 13. 英詩の翻訳 14. 写真撮影 15. 子供のための造形 16. 犀川いかだアドベンチャ 17. 気球の製作(1) 18. 気球をつくる(2) 19. 太陽熱発電
チーム編成	第1次希望選択	同 左	自由な希望
チーム構成	定員制(学年別・男女別・24～25名)(3年は参加せず)	同 左(22～25名多少の増減を認める)	同好の士1.2年 各約8名 ずつ(2年が1年を勧誘)
チーム顧問	顧問指導制 (HRAの顧問免除)	同 左	単に出欠の確認と監督 (指導制は排除)
テーマ	テーマ固定 (年間・半期顧問提示)	同 左	テーマ固定(半期・生徒の自主的な決定)
テーマの組合せ	半期毎に変わるものの組合せ は学校の操作	同 左	な し
計画	計画立案の話し合い	同 左	計画立案の自主制
回数と時数	年間実施回数 10回 20時間	同 左 10回 20時間	同 左
参加学年	1, 2 年 (3年は教科教育)	同 左	同 左
実施の仕方	ホームルームと交互に隔週 毎に1回連続して2時間	同 左	同 左

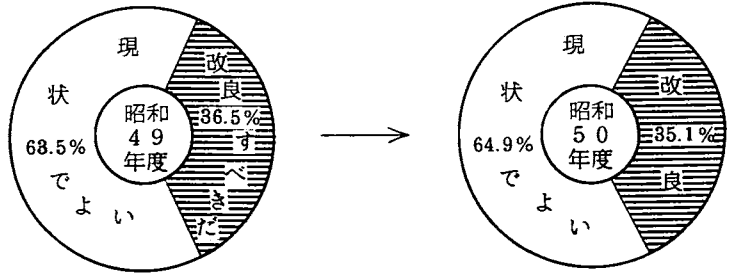
3. アンケートによる意識調査 (1)

昭和48年度の活動についてはすでに公表してあるので、これを省略し、昭和49年度と50年度のものについて、各年のアンケート資料があるから、それらについて調査したところをまとめてみます。(昭和51年度分についてはアンケートの項目が多少異なるので、後述します。)

1) 方法について

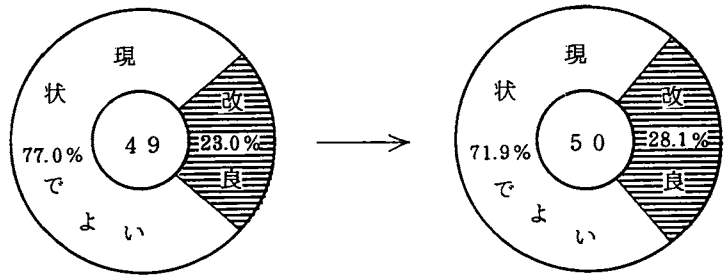
イ)

テーマの組合せの仕方



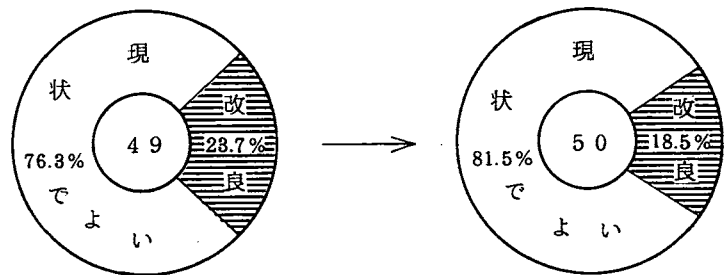
ロ)

時間と回数



ハ)

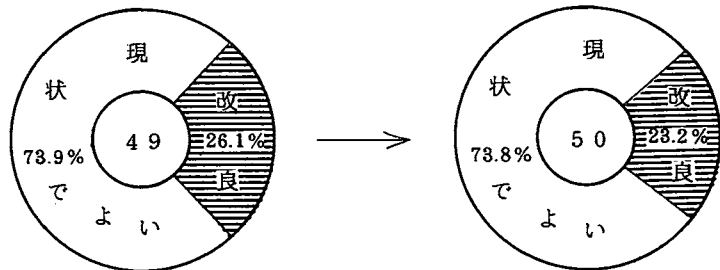
前後期の2期制



2) 活動内容について

イ)

テーマの設定の仕方



前項のアンケート項目は、○×で回答を求めたものであるから、その数と％は一目瞭然である。それ以外の項目は記述回答であるから、49年度分については傾向として大体のところをつかむにとどまったのであるが、50年度分については、49年度の記述回答をそっくり利用し、それを使い、それに番号をうって、賛否を○×で回答させたので、数と％が明白に出てきました。次に生徒側の特色を拾ってみます。

a) 両年度のアンケートには各項目について、次の点を除けば、それぞれ似通った結果がでている。すなわち両年あまり変りがないということである。

- 「時間と回数」の項目で、現状で良いとする支持率 6.5 %減少。
- 「前・後期 2 期制」の項目で、現状肯定が逆に 5 %増加。

b) 各顧問から出されるテーマを、生徒の意向を入れないで、学校側が独自の考え方で、前後期 2 期分に配分して組合せることについて、他の項目と比較して支持率が著しく低い。左図の調査と必ずしも一致しない点があるが、こゝにも、次の調査にもあることが注目される。

c) 以上の a), b) いずれにしても、チームによっては支持率が極端に相違するものがある。次に上記項目について、特に意見を寄せたものがあるので、生の言葉として拾ってみる。

1. もっと多くのチームの経験ができるようにした方がよい。(42.5 %)
2. 学校側の「人気のあるチームに人が集中するのを防ぐ」という意図はわかるが、半年間つまらないチームに所属するのは良い方法だとは言えないのではないか。(71.3 %)
3. 後期新たにチーム編成をやりなおしてほしい。(54.4 %)
4. 2 期に分けずに年間通してやるべきだ。(37.9 %)
5. スポーツ系と文化系を前後期に 1 つずつ選ぶ。(34.5 %)
6. もっと自由に。(77.4 %)
7. 遊びと固苦しいものの片寄りをさけよ。(74.8 %)
8. アンケートで組合せをきめる。(48.3 %)
9. 組合せの面白みに高低がある。(79.7 %)
10. 最初から組合せがきめてあったのでは選びにくい。(72.0 %)
11. まじめクラブと遊びクラブの 2 つに分けて、前後どちらか一方ずつとるべきだ。
(25.8 %)
12. 各人が希望するチームを書いて提出し、学校側で適当にそれぞれにチームに配分しては。(49.0 %)
13. 前期に選んだ 1 つのチームについて後期に 2 つ位選べるようにしてほしい。(56.3 %)
14. チームの組合せを固定せずに自由選択にした方がよい。(77.4 %)
15. チームの性質と気象条件を考えて組合せる。(61.8 %)
16. 娯楽的なものが重なるものと、教養的なものが重なるものの均衡。(61.7 %)
17. 組合せのどれをとっても、一方はあまり気がすまない。(59.8 %)
18. 前後期のテーマの自由選択化。(76.2 %)
19. 時間数が少ない。毎週の方がよい。(59.8 %)
20. どうせやるなら、もっと多く。(70.1 %)
21. 諸行事でつぶれた場合の穴埋め。(59.8 %)
22. 少しすくない。2 週間もあると間が長すぎてつまらない。(66.7 %)
23. 毎週してはどうか。(57.5 %)
24. 1 日全てをチームの時間にしては。1 日がだめなら 4 時間はほしい。(35.2 %)

25. 回数が少ない。隔週ということになっているが、はなはだ不規則である。(79.3%)
26. 1週1時間で、1ヶ月ごとに2時間の時間をもうける。(32.6%)
27. もっと多く毎週2時間に。(44.4%)
28. 毎週してほしい。隔週だと前回の内容が忘れて進歩しない。(62.5%)
29. チームの時間がつぶされないようにしてほしい。(72.4%)
30. 前の年と同じテーマを選ぶことができたのは良かった。(20.3%)
31. 前の年と同じテーマを選ぶことになって残念だ。(19.5%)
32. 年間を2期に分けないで、1つの方がよい。(41.8%)
33. 前期も後期中途半端でおわるから、2期に分けない方がよい。(46.4%)
34. 時間不足のため、前後期統一すべきだ。(41.4%)
35. チームによっては、半期では短かすぎるものがある。(78.5%)
36. ……………省略
44. 前後期に分けないチームがあるが、分けた方がよい。(28.4%)
45. テーマの設定は、生徒からアンケートをとり、それに基いて、先生方の意見をいれて、検討する。(78.5%)
46. もっと楽しいもの、スポーツなどを多く。(75.9%)
47. 茶道、華道、関係、作詩、作曲関係、英語の歌や詩関係をもっと。(41.4%)
48. もっと具体的なテーマを設定した方がよい。(62.1%)
49. 種類を増やす。(69.0%)
50. 社会に奉仕するチームを作してほしい。(25.7%)
51. 更に発展できるテーマを選ぶべきで、現行のものは暇つぶしにはかからない。(53.8%)
52. ユニークなテーマがあって良いのでは。(88.5%)
53. 数理哲学がないのが残念。(26.8%)
54. 先生も生徒も積極的に。(78.5%)
55. 生徒の希望を取り入れてもらいたい。(94.3%)
56. テーマということがはっきりしない。(67.8%)
57. 生徒の希望も反映させてほしい。アンケートをとるべきだ。(83.1%)
58. 中味がわかりにくい。(57.1%)
59. テーマにこだわって活動する必要はない。(55.9%)
60. くだらないものばかりであったので、来年はもっとおもしろいものをしてほしい。
(62.8%)
61. 興味をそそる内容がない。つまらない。(64.4%)
62. 目的のはっきりしないものは設ける必要がない。(60.2%)
63. 現状では遊びの感が強く、意欲がわかない。(32.2%)
64. もっと活動的なチームをふやす。(80.5%)
65. もう少し高度な内容を含んでも良いのでは。(55.2%)
66. 目的が明確でない。もっと内容まで具体的に検討してから実施を。(65.9%)
67. もっと興味のもてるものにしてほしい。あまり深く専門的な事は避けた方がよい。
(61.3%)
68. 見たとたん不安と恐怖をおこすような内容はやめて欲しい。(68.6%)
69. なにをやりたいか生徒にアンケートをとったらどうか。(86.2%)
70. 今後のテーマがどのように決められたか知らないが、生徒たちから原案をとったら

どうか。(86.2 %)

以下省略

d) 記述回答の分についての特色

(i)(i) 内容的に50%以上が望ましいとする意見を拾ってみる。

- 80. 学年をこえたつながりがある。(57.1 %)
- 88. 個人でやれることでもチーム活動でやって良い。(54.0 %)
- 91. 半分遊びのようでも本来の目的を失うということはない。(53.6 %)
- 100. 遊び中心で良いのでは。(61.3 %)
- 104. 趣味の延長だって良いのでは。(66.3 %)
- 106. 現状では遊びという感じが強くても、充実感はある。(53.6 %)
- 129. 隔週2時間ゆっくりしたい。(64.4 %)
- 152. 研究的な内容にして、発表するなんて、固苦しいことはいやだ。(57.1 %)
- 154. 学年の枠はずれた。(56.3 %)
- 184. 授業の延長はいやだ。(55.2 %)
- 204. 技術の厳格な習得を求めるよりも、遊びの要素があると良い。(59.0 %)
- 205. 専門的な知識技術の習得はいやだ。(51.7 %)

(ii) 批判または注文の色彩があるもの

- 92. 「協力」の精神が培われたとは思わない。(71.3 %)
- 183. 毎時間異ったことをするのはいやだ。(64.8 %)
- 193. 内容の高度なチームも親睦が計れるのならそれでも良いのでは。(60.9 %)
- 196. 新入生といえども平等に最初から活動に参加したい。(64.4 %)
- 197. 教養講座に自由に参加するやり方はいやだ。(58.2 %)
- 202. 顧問のない自由な活動をすることはいやだ。(58.6 %)

(ii) 80 % 以上の高い支持率を得ているもの

(i) 内容的に望ましいとするもの

- 75. 授業では得られない技術その他の習得ができて良い。(81.2 %)
- 78. 視野を広げ、普通やらないことに取りくめることが良い。(87.7 %)
- 79. 個人ではできないことに取り組める。(85.8 %)
- 87. 学校で勉強以外の雑学的なものの取得を歓迎。(83.1 %)

(ii) 批判または注文の色彩があるもの

- 123. 生徒が自主的になって、もっと自由な楽しい気風を作るべきだ。(87.4 %)
- 125. 自主的に参加しようとしめない生徒がいる。(81.2 %)
- 132. チームとしての方針は年度初めに話し合っておかないと、だらだらとして良くない。(81.6 %)
- 139. 人数制限のために希望していないチームに入れられるのは反対だ。(80.5 %)
- 142. チームのテーマによっては、人数を違えても良いのではないか。(90.0 %)
- 143. チームのテーマは広いものから、極端に専門的なものまでいろいろあって良い。
(83.5 %)
- 145. もっと計画的に活動すべきだ。(81.6 %)
- 153. 魅力あるチームにしてほしい。(92.0 %)
- 158. テーマの決定は生徒の希望を無視するな。(87.7 %)

159. 個々が自覚をもって参加し、いろいろな面からチーム作成をすべきだ。(87.0%)
162. 目的のあるチームを作るべきだ。(87.7%)
163. 自主的に活動するようにしたい。(92.7%)
164. もっと外へ出て、自由に活動すべきだ。(81.6%)
165. 交流を深める活動にしたい。(85.4%)
168. 顧問本位でなく、生徒本位の活動にしたい。(86.2%)
169. 極力各人の希望を充たすチーム活動にしたい。(87.0%)
170. 生徒からの意見を取り上げて欲しい。(88.1%)
172. 明るく楽しい悔のない活動時間にしたい。(90.8%)
173. 活動的なチームにしたい。(88.5%)
175. 自分の興味あるチームに入れるようにして欲しい。(87.7%)
177. もっと対人関係が良くなるような活動を望む。(81.2%)
178. リラックスして楽しめるチームにして欲しい。(88.1%)
185. 絶対に必修クラブ活動は必要だ。(80.1%)
188. チームの種類は一方的に決めるべきではない。(87.7%)
194. みんなが喜んで参加できるチームにするべきだ。(92.0%)
195. 楽しいリラックスした気持で行なわれるようなチームを。(90.4%)
199. 人数制限をもっとゆるめるべきだ。(86.6%)
209. 普通では体験できないことをやって、特色あるものにしたい。(88.9%)
210. 外に出て、実際、生のものに触れ、経験するようにしたい。(81.6%)
212. 個人ではできないものをするチームにしたい。(84.7%)

(Ⅲ) 以上の特色をみると、必修クラブ活動に対する生徒側の意識の領域、程度というものが、大体見当つくはずである。これをまとめてみると、次のようになると思われます。

- 隔週毎の必修クラブは必要だ。
- 生徒を抜きにした全ての運営活動には反対だ。
- 授業の延長の活動は望ましくない。
- 計画性のある楽しい活動的なものにしたい。
- 厳しい制限は反対だ。

4. 顧問の意見

顧問側のアンケートから得た意見を整理してみると、次のようになります。

- 組合せの仕方について
 - ・定員厳守にこだわらなくてもよいのではないか。
 - ・工作、手芸は年間通してした方がよかったと思う。
 - ・予備調査を行って、テーマを2つ選ばせて、共通のものの多いもので組合せを行っては。
- 時間や回数について
 - ・現状では技術を深く究められない。年間を通してやるべきだ。
- 前後期の2期に分けたことについて
 - ・後期も、その時になってテーマを選択させる方法が考えられないか。
 - ・2期制には反対だ。
 - ・少なくとも1年間同じテーマでじっくりやらねば身につかない。
 - ・意欲のないテーマのところでは、顧問も生徒も大変である。その結果、チーム活動自体

がだらけてくる。

○テーマの設定の仕方について

- ・運動系がもっとあった方が良い。
- ・体育館とグラウンドが利用できるテーマも。
- ・顧問がもう少し熱意をもって掘り下げられるようなテーマが出るのが望ましい。
- ・生徒の要望するテーマの中から、教官が選択し、その後に設定しては。
- ・生徒の要望をなるべく尊重するように。

○今年参加したチームについての意見について。

- ・同じテーマで「××チーム」を2年間開講したが、指導力の問題なのか、失敗に終り、今後いろいろ考えてみたいと思います。
- ・生徒のみで運営するのは難しい。有意義なものにする為にはもっともっと手をかけねばならない。
- ・生徒は互いに愉快に過していた。
- ・皆楽しんで、大体うまくいった。
- ・後期チームは全くやる気がみられないのは組合せに問題があるのか。
- ・仕方なしに選んだ少数の生徒が、どうしても気の毒な感じ。
- ・希望した生徒ばかりのせいかな、大変意欲的であった。

○チーム全体のあり方について

- ・その効果ねらいについては、息抜きになっている。
- ・教科以外の場で生徒と触れ合える。
- ・受験時代の現状に於ける一つの息抜きとしての効果は十分にある。
- ・だらしのない生徒を養成しはしなかったか。
- ・教室で正規の授業では得られない経験を得させ、人生をより幅広く豊かな気持ちで過ごすことができるようになるために。
- ・人間的な触れ合いが第一で、技術はその次。
- ・1年生は芸術の時間とチーム活動の時間の2回分散授業があるのは問題だ。特に清掃、連絡に支障がある。
- ・チーム活動とHRの時間の関連はどうあるべきなのか。
- ・いろいろ検討されるべき問題が出てきているのではないかな。
- ・テーマの扱い。
- ・後期の生徒が特に受身的だ。
- ・人数の均こう化に厳しくのぞむことなく、もっとふくみをもたしたら。
- ・顧問によってテーマが決まると、その年だけしか活動がないということにならないように、だれでもできるシステムを組めないだろうか。

○今後の方向について

- ・学校のエデュケーションの一環だから、もっと厳しいものがあるといいのではないかな。
- ・ゼミ方式の講座でも良いのでは。
- ・教師の指導のパターンはこれからではないかな。
- ・活用できる施設の利用
- ・HR担任でもチーム顧問がかねられるように。
- ・好きなチームに入って活動し、1年通してやると、良いだろうと思うが、それだと従来のクラブ活動とどう関連づけるのか。

- ・先生も生徒もやり易いテーマがあれば良いと思う。
 - ・テーマのない先生にとっては体育系のチームがあれば救われる。
 - ・前期、後期に分けるなら、後期も選択にしてやっては。
 - ・気持のあった生徒達で折角の必修クラブ時間を思う存分楽しめるようにしてやりたい。
 - ・現在実施中のチーム活動は顧問教官の負担が大きい割にその必要性、効果共にあまり大きくないと思われる。一方スポーツ大会をはじめ各種の行事のため、年間数十時間が費やされており、2年間で100時間を超える時間がよく似た趣旨で既に実際に使われている。これだけで、必修クラブ活動の時間と内容を本校では充分消化していると考えたい。
- また、一方では、行事のため多くの授業が欠けているのであるから、チーム活動の時間には、行事で欠けた授業（特に3教科）を実施してはどうか。100時間をこえる授業の欠如は生徒の学力に少なからぬ影響を及ぼしていると思われるし、現状のままでは、特に1年生は、芸術と関連して、だらけた雰囲気になりやすい恐れがある。
- ・3年生が受験勉強の能律をあげるためにもせめて必修クラブの時間位は下級生との交流をして、和やかにくつろげる時間にすることができないものかと思う。
 - ・専門的にするとすれば、一年を通した活動の方が良いと思う。

5. アンケートによる意識調査 (2)

昭和51年度の必修クラブ活動実施に関するアンケートは、49年度、50年度のアンケート項目と異なるものがあるので、こゝで別途扱いにしてまとめてみます。

○チーム活動の選択について

- ・従来のやり方でよい。(39.0%)
- ・自由選択。(43.9%)
- ・芸術選択のように予め届出た後に割りあてられた方がいい。(13.8%)

○前後期2期制のチームについて

- ・従来通りでよい。(61.5%)
- ・年間通してやるべきだ。(40.5%)

○チーム活動のあり方について

- ・外に出て活動の場を求めたい。(56.5%)
- ・固定したテーマを学校側から示されるよりも、自分達で決めたい。(47.7%)
- ・従来のように固定したテーマのあるチーム活動がよい。(41.0%)
- ・もっと積極的な活動をしたい。(40.6%)

○チーム活動の内容について

- ・計画はさっぱり立てなかった。(34.3%)
- ・楽しく実施できた。(33.5%)
- ・計画にこだわらず実施した。(28.5%)
- ・計画をたてて実施した。(25.1%)

○チーム活動を通して得たものについて

- ・学校生活の中で特異な息抜きの場となった。(56.1%)
- ・教科学習を離れた開放された気分で、仲間と話し合えた。(31.0%)
- ・毎回早く時間が経たないかと願った。(28.5%)
- ・毎回楽しい気分で何かを得たように思う。(27.6%)

以上のほか、アンケート回答率は低いが見捨て難い意見について、これを拾ってみると、次のようなものがある。

- ・チーム活動はやめたほうがよい。(11.3 %)
- ・顧問の指導が強すぎる。(12.1 %)
- ・顧問の関心がうすい。(17.2 %)
- ・チーム活動は内容がなくて、つまらないと思った。(15.5 %)
- ・時間をもったいない。(8.8 %)
- ・チーム活動は希望しない活動だから、つまらないと思った。(9.2 %)
- ・緊張の連続で、息抜きなどできなかった。(8.8 %)
- ・人間らしいひと時が過せられた。(11.7 %)
- ・何も得るところはなかった。(25.5 %)

6. 問 題 点

必修クラブ活動が実施されて5年目に入っている。終始改正なく一貫して実施してきた学校、一部修正しながらも当初案を守って実施してきた学校、思考錯誤的に毎年よりよい活動を目指し、それができると信じて実施した学校、全然実施しないで、他の教科で埋め合っている学校、また、課外部活動と置き換えて生徒全入を計って実施してきた学校等、様々であろうと思われる。それほどまでに今日必修クラブ活動が今だに固定しておらず、流動的な過渡期にあると思われる。それぞれの学校で何らかの解決を迫られている問題点が少なからずあることは間違いのないところだろうと思われる。

アンケートを使って、生徒側、顧問側の意識調査によって、それぞれの立場の必修クラブ活動に関する特色が見出されたことは前述の通りである。しかし、そのすべてを即問題点として扱うのが良いかどうかは、別の問題であるけれども、こゝに度外視できない問題点を整理してみます。まず実施上の面から。

教育課程の中で年間1単位を占めるこの必修クラブ活動は、年間35時間の実施時間が消化されなければならないが、本校では2時間連続の隔週毎の実施で、年間多くて12回すなわち24時間しか実際には実施されていない。一方、本校には合同授業という名称のもとに全校生徒が一堂に会して合同の授業を受ける機会を年間5・6回設けております。これは、自然科学、人文科学、社会科学の各分野からいわゆる文化人を、あるいは芸術家を中央、地方を問わず、招へいして、講演と質疑応答を依頼しております。本校ではこれを教科外教育活動の一環として扱っているので、そこで消化される年間10・12時間の時間をこの24時間に合わせ、年間35時間を消化したことにしている現状であります。学校行事等によっていろいろ授業が削減されている中で、この必修クラブ活動の実施だけを厳密に年間35時間実施させるといことの方がむしろ問題であるとされたら、均こうある学校教育がとれないであろう。隔週毎実施されているこの必修クラブは、それで良いとしても、もう一つ隔週毎2時間連続しているホームルームは、これで問題ないかというと、そうではない。2週間毎に1回しかないロングホームルームは、学級経営上、学級担任は大変な問題をかゝえておるばかりでなく、生徒自体も大変である。この変則な時間は全く必修クラブ活動のためのみに考案されたものである。すなわち、長時間活動できるので深く活動できて、特に製作時はかなり計画の実施が進むので歓迎されているが、反面、次回まで2週間あるので、間のびしてしまい、同じ気分、同じ意欲の持続とか復活については簡単には行かないといった問題もある。つまり2つと良いことはないのである。

顧問が必修クラブ活動の指導意識を捨て去らない限り、研修と負担の過剰意識に苦しまなければならない。学習指導要領にもあるように「生徒が自発的、自治的な活動を展開し」て行けるような指導といっても、単に技術的なそれであろうとは考えられない。情操豊かな人間関係をそれぞれ赤裸々なありのままの姿の教師と生徒の間で教室以外のところで作って行くことが、すなわち、指導であると考えて良いのではないか。単に知識の伝達、技術の伝達ではこのような人間関係は得られないのだから、授業の延長のような活動は厳に控えなければならない。この色彩濃厚な活動をして、壁にぶつかった学校の例を2,3にとどまらず聞いています。しかし、この種の指導意識を捨て去るといっても、なかなか難しい。個々別々、それぞれの特色があろうし、そのことをむしろ意識する顧問だっていても不思議ではない。本校では昭和52年度の必修クラブ活動で、この指導意識を全員が年間を通して同じ歩調で捨て去る大変革の方式を実際にとり入れて実施したわけです。（この事については、先に述べたように、別の機会に詳述します。）

3年生には必修クラブ活動を、実際には参加させないで、それに変わる教科教育を受けさせていることも、次の問題点であろう。本稿の1. 経緯のところ、既に触れたので重複を避けるが、3年生の中には、この活動を息抜き場としての効用を認めているものもあるし、それを別にしても、3年生にこの必修クラブ活動に参加させたからといって、懸念するほどに教科学習に影響を及ぼすことが大きいとは予測し難いし、考えられもしないのではないか。しかし、3年生に参加させない事実について、とかく反論する意見の持ち主には出合わないし、それにかわる代替えの教科教育の実施について反論する人にも出合わないのが現状であります。つまり、この事はそう決定してしまっていることであるから、今更ふり返って考えないせいなのかも知れませんが。

実施上からの問題点はまだ幾つかあります。その中からもう少し拾っておきます。

どの学校においてもそうだと思うが、芸術の時間は選択教科のため、学級が解体されて、それぞれの教室に生徒は移動して行って授業を受けています。必修クラブ活動の時間もそうで、この移動が週に2回あると、何となく雰囲気ざわめいて、落ち着かないという現象が起っています。これは慣れれば問題ないことかも知れないが、そのあとがまた良くない。教室の掃除と、必修クラブ活動後の後始末との関係。わざわざ指導しなければ、どうにもならない場合ですら発生してきます。しかし、この問題ばかりは、指導上解決できる問題であるから、これで触れないことにして、次に、生徒側からみた問題点がある。52年度以前までのものを拾ってみると、顧問のテーマの揭示の仕方があります。これは生徒の意向よりは顧問の指導できる範囲内のテーマを顧問が苦慮の末、揭示するのであるから、およそ生徒から歓迎される筋合のものではないのである。そのテーマを別のテーマと組合わせて、半期毎に交替して活動するこのやり方についても問題がある。テーマの組合わせについて、学校側がある基準に従って一方的に組合わせてしまうのである。バランスのとれた組合わせ。すなわち、年間通して、平均して面白いであろうと思われるような組合わせ。またそのような組合わせを生徒が年度初めに選択するわけであるが、この選択の仕方と、定員についても問題がある。生徒の希望するクラブに必ずしも入れないし、また余計ない不足の中から選択しなければならない貧しさがある。この事自体社会の縮図としてみなし、教育の大切な一面であると我々教官の方は考え、またそのように指導するわけだが、生徒の方はそれで満足できないでいる。まだほかに、活動内容の指向について、回数について、他校の状況について、何をやっても脱落する生徒、すなわち協調性の乏しい生徒について等いろいろあるが、この位で止めます。

以上は、必修クラブ活動を実施する上での問題点について触れてみましたが、次にこの活

動を本質的な面から考えてみたいと思います。

学習指導要領（第3章第2款、第3の2）によると、「全生徒がいずれかのクラブに所属するものとする」とうたっていますが、この点を除けば、この必修クラブ活動が実施された昭和48年度以前のクラブ活動、すなわち課外活動にみられる生徒会の各部（運動系、文化系）の活動とどの位違っているかを考えてみると、つきつめてみると、「一部の生徒を対象とする選手養成」につながらない活動にしていることぐらいであろう。つまり、全生徒参加の活動にし、選手は養成しない活動にするならば、昭和48年度以前のクラブでも間に合うと考えても許容できるわけである。しかし、対外試合、対外競技に参加するための特別な活動（選手養成）をしなければならない部員と、そうでない部員との関係は、度外視できない問題である。この「そうでない部員」の参加が、いわばこの必修クラブ活動の大きなねらいであったのだらうから、せっかく、前者に後者を加味した活動を考案しようと努力しても、長続きしていくだろうか。すなわち、後者がすぐに前者から離脱していくような活動内容にしてはいけなわけだ。それにもかかわらず、前者はそれで満足していくわけがない。結果は明白である。週1回の必修クラブ活動の時間だけは、これら両者が協調し合って、活動していくようにすることはできるのではないか。その時間は放課後ではなく、授業時間中のことだ。

この点からすると、本校の必修クラブ活動は、全く別質、別種のもので、独自の目標と意図と理念を掲げて、考案した活動である。この事については、先の経緯のところで触れてあるし、48年の研究発表時に既に公表してある。この特別な活動を本校では特に「チーム活動」と称して、これまで活動実施をみてきたわけだが、この問題点は先に述べた如く、いろいろとあるわけで、必ずしも満足できるものではなかったわけである。この年昭和52年度において、これらの隘路をなくそうと、全く別の角度からこの運動にとりくむことにし、生徒の自治にゆだね、自由なる選択と活動と運営を生徒にまかせ、顧問の先導的な指導を一切排除したわけである。この活動は今しばらく続けて視察しないとわからないが、その長所は、従来の問題点のうち、少なくとも生徒側の要請する問題点は解決されているという点で、大きな成果があり、成功でもあった。しかし、一方において、依然として、課外活動としてのいわゆる従来の部活動と全く別箇の扱いをしている点で、果して、どれだけの期間にわたって長続きしていくかは、これまた問題のあるところである。今少し時間が要するというのが現実である。

その上、昭和54年度からは、いわゆる大学入試の共通1次試験がある。この新しい情勢が、それまでの期間に新たなる教育課程の編成を促していくだろうし、それによって、必修クラブ活動がどのような影響をうけていくのか、これまた新たなる問題としてクローズアップされていくだろう。何とも目まぐるしい時期ではある。